＜論文＞

学生生活における意識の類型とその特徴（１）

――鳥取大学地域学部学生調査をもとに――

大谷直史*・小林勝年*・柿内真紀*・太田美幸*・高口明久**

Analysis of University Students' Attitudes towards Daily Life According to Four Types (1)

――Based on the Survey of Tottori University――

OOTANI Tadasi, KOBAYASHI Katsutoshi, KAKIUCHI Maki, OHTA Miyuki, TAKAGUCHI Akihisa

（＊鳥取大学生涯教育総合センター，＊＊鳥取大学地域学部）

キーワード：大学生，類型，生き方，意識調査
Keywords: University Students, Type, Lifestyle, Opinion Survey

はじめに　大学生の類型把握に向けて

学生らしさは学問を追及する姿勢に表れるかと言うとそうでもない。もちろん聞かれれば規範的にそう答えるかもしれないし，中にはそういった志を持った「伝統的学生」[i] もいないわけではない。そして溝上慎一が述べるように，学業の出来不出来が自己評価と強く結び付いており，少なくとも学業に取り組めていることが大学生としての拠り所として機能していることも見逃すことはできない。しかし普段の学生の様子を見て（それは見える部分しか，あるいは見たい部分しか見ていないとしても），学生にとって学業が一番大切なのだと実感できる関係者は，幸せだと思える。学生はサークル活動をし，友達とおしゃべりし，恋愛・アルバイト・趣味に忙しい。あるいは無気力であること，まったりとしていること，のんびり，うだうだしていることに忙しい。大学がモラトリアムの期間であるとするならば，これらはすべて正統に大学生であることを証明する行為に他ならない。

結局何を持って「学生らしい」とするのか，学生固有の文化（「学生文化」）は何なのかは，一言では語りがたい。たとえば武内清は，1997年に19の大学を対象とした調査で，「「友人との交友」「学業・勉強」「趣味」「アルバイト」「異性（恋人）との交際」「サークル活動」「ダブルスクール」の七つの分野の活動があり，その相関が低く，独立した分野になっていることが示された」とし，多様な学生文化が形成されているとしている[ii]。また新村[iii]は，伝統的学生に対して増加している学生像として，１）資格取得型（語学検定や将来の就職ばかりを目指すタイプ），２）学生生活を楽しみたい型（部活・サークル，アルバイト志向のタイプ），３）無目的・無計画型（その日暮らしのタイプ）をあげる。

この他大学生に限らず若者を対象にすれば，類型論は無数に存在すると言ってよい。「ガリ勉」と「ヤンキー」は古典的な両極端としてしばしば語られる[iv]。そして近年，対人関係能力の価値の上昇に伴い，当該能力に劣るとされる「オタク」「ひきこもり」や「脱社会的存在」という類型も着目されている[v]。また「自分探し」は両義的に使われている言葉であるが，「個性」や「心」が重視されると言われる社会において，近年ではそれを持たない弱者を指し示す場合が多い[vi]。

大学生に限定した類型区分は，溝上慎一らの研究がある[vii]。ここでは学生の大学観に関する設問から5つの類型――「自分探し・モラトリアム型」「消極型」「モラトリアム型」「勉強重視型」「積極型」――を得ている。溝上が注目するのは「積極型」と「自分探し・モラトリアム型」である。両類型とも大学に「出会い」や「自分探し」の場所を見出すのは同じであるが，それに加えて「積極型」は勉強や将来準備といった実利的なことを見出し，「自分探し・モラトリアム型」はモラトリアムの場を見出すことに違いがある。大学に対してあらゆる側面で積極的に位置付けている「積極型」は，学業や大学生活への満足度も高く，将来への見通しも持っている。一方「自分探し・モラトリアム型」は総じて意欲が低い。「自分探し」については本論では直接扱っていないが，抽象的な意識を持った学生層は気になる存在である。

本論の目的は，現代の学生がいかなる性向を持ち，いかなる学生文化を形成しているのか，それを以上のような類型論と比較しながら把握することである。使用するデータは鳥取大学地域学部・地域教育科学部生を対象として，2004年度から実施されている学生への質問紙調査の第3回（2006年4月）の調査結果である。第3回は，地域学部1～3年（各学年定員190人）と教育地域科学部4年（定員160人）全員を対称に行われた。この一連の調査は，もともと教育地域科学部から地域学部への改組（教員養成課程の廃止）に伴う学生の変容と，地域学部における教育の評価を目的の一つとしていた。それゆえ調査対象が鳥取大学地域学部生に限られており，そのまま一般化することはできない。鳥取大学自体が一地方都市の県下唯一の国立大学であること，地域学部は地域政策・地域教育・地域文化・地域環境の4学科で構成されており，地域環境学科以外はすべて文系の学科であること，また「地域学」という新しい学問領域を冠した学部であること，前身が教員養成課程を有していたため，地域教育学科を中心に教職免許取得希望者が多いこと，などが特殊性としてあげられる。このような限定付きではあるが，仮説的な提起を含めて次章以降，各共同研究者による分析を記す。

第1章　大学生の意欲から見た学生類型

本章の課題は，大学生の類型を提起し，その概要を記すことである。図1-1は14項目に対して，「あなたは今，以下の事柄をどの程度したいと思いますか」（5件法）と聞いた回答の割合である。「友人とふれあう」「将来に役立つ資格をとる」で「そう思う」との回答が半数を超えているほか，設問に提示した項目に対する肯定的な回答が目立つ。

先の質問を用い，SPSS により因子分析を行った。その結果「遊び志向」「健全志向」「気まま志向」「非日常志向」の4因子を得た（表1-1）。「遊び志向」と「健全志向」の相関は高く，「健全志向」と「気まま志向」の相関は低い。また「非日常志向」は比較的独立している。これら因子名はそれぞれの因子負荷量の高い項目（網掛け部分）の設問に共通していると考えられる性向を表したものであるが，「健全志向」については若干説明が必要かもしれない。何をもって「健全」とするかは当然ながら時代や文化によって異なる。学問やスポーツに打ち込むことが「健全」であるという意見もあろうが，比較的教員や社会の成員によって許容（推奨）されやすい友人とのふれあいやボランティア，資格取得を含めて「健全」とした。また第1因子の「遊び志向」にアルバイトが入っている。アルバイトが学費や生活費のためであったり，やりがいを求めて行われたりすることも考えられる（第3章で検討）が，意識の上では消費生活や趣味と同じ因子を構成していることも興味深い。

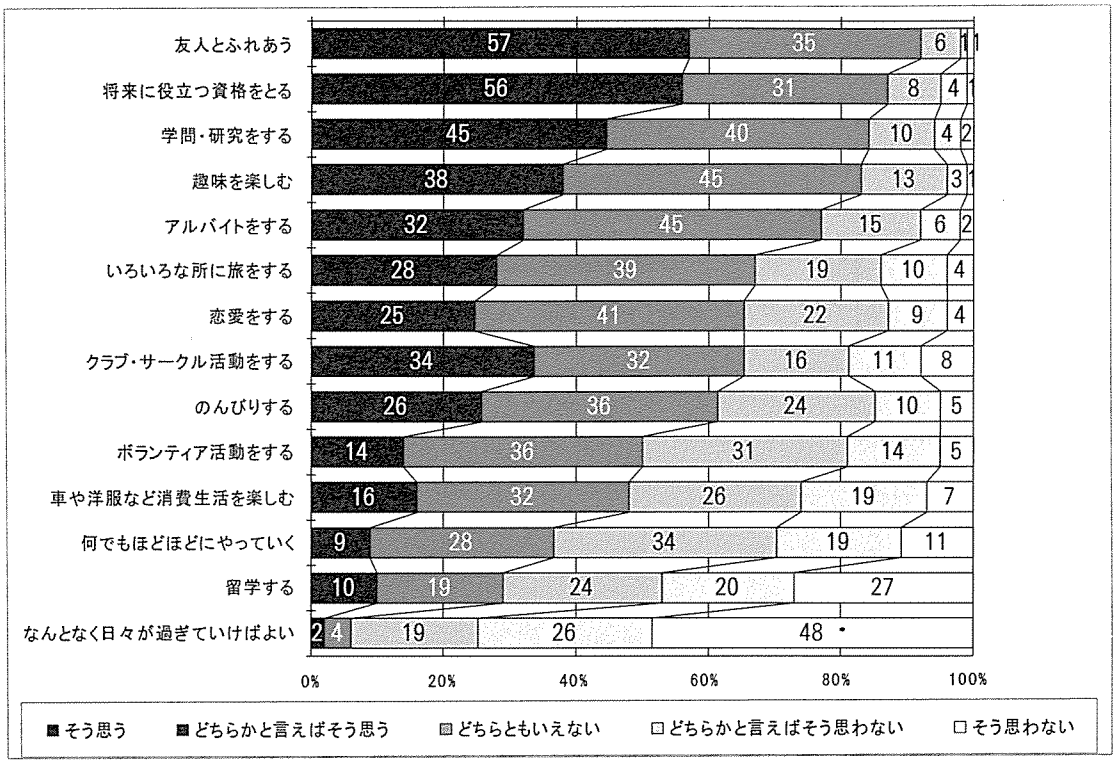

図1-1　大学生活への意識　　※グラフ中の数字は％(以下同様)

表1-1　因子得点及びクラスター

	遊び志向	健全志向	気まま志向	非日常志向
車や洋服など消費生活を楽しむ（消費）	0.663	−0.189	0.054	0.110
恋愛をする（恋愛）	0.569	0.133	−0.117	−0.055
趣味を楽しむ（趣味）	0.497	−0.116	−0.076	0.174
のんびりする（のんびり）	0.466	0.016	0.335	−0.133
アルバイトをする（バイト）	0.408	0.092	−0.001	0.138
学問・研究をする（学問）	−0.283	0.598	−0.009	0.058
友人とふれあう（友人）	0.378	0.493	−0.009	−0.088
ボランティア活動をする（ボラ）	−0.002	0.472	0.049	0.285
将来に役立つ資格をとる（資格）	−0.012	0.450	0.039	0.040
クラブ・サークル活動をする（サークル）	0.256	0.443	−0.038	−0.103
なんとなく日々が過ぎていけばよい（日々）	−0.074	−0.027	0.758	−0.008
何でもほどほどにやっていく（ほどほど）	0.011	0.047	0.668	0.058
留学する（留学）	0.003	0.080	0.023	0.570
いろいろな所に旅をする（旅）	0.252	−0.008	0.002	0.535
因子相関行列　健全志向	0.410	1.000		
気まま志向	0.181	−0.353	1.000	
非日常志向	0.290	0.232	−0.014	1.000

スクリープロットにより，４因子を抽出（固有値も 1.0 以上）。
因子抽出法：主因子法　　回転法：Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

最終クラスタ中心	遊び志向	健全志向	気まま志向	非日常志向	人数
ケンゼン	−0.040	0.458	−0.611	−0.018	225
ゲンキ	0.924	0.548	0.192	0.645	153
テキトウ	−0.010	−0.738	0.941	−0.216	152
マジメ	−1.452	−0.829	−0.389	−0.688	90

ここで得た4因子の因子得点を用いてクラスター分析を行い，4つのクラスター――〈ケンゼン〉〈ゲンキ〉〈テキトウ〉〈マジメ〉――に分類した。〈ケンゼン〉は225名（36%）と最も人数の多いクラスターで，「健全志向」因子のみが高く，「気まま志向」が低くなっている。〈ゲンキ〉は「遊び志向」「健全志向」「非日常志向」の3因子の得点が高く，何にでも興味を示し，やる気にあふれているクラスターと考えられる（153名，25%）。〈テキトウ〉はその逆で，「気まま志向」だけが高く相対的にやる気のない，まったりした考えを持ったクラスターである（152名，25%）。〈マジメ〉はすべての因子で低い得点なのであるが，「学問・研究をする」という項目に関してだけは〈ケンゼン〉よりも「そう思う」と答える割合が高い。「健全志向」に含まれる他の項目の影響で，「健全志向」は低くなっているが，学問だけには情熱を示すことから〈マジメ〉と命名した。これはたとえば14の項目の内，「一番大切なこと」はと聞いた設問とクラスターとのクロス集計（表1-2）にも表れている。

一番大切なことはと問われて，「学問・研究をする」ことと答えるのは〈マジメ〉が49%と最も高く，〈ケンゼン〉が44%，〈ゲンキ〉が26%，〈テキトウ〉が20%である。クラスター別では〈ゲンキ〉に「友人とふれあう」（22%），〈テキトウ〉に「趣味を楽しむ」（10%）が多くなっている。同時に同じ14項目を用いて「一番幸せなこと」も聞いている（表1-3）。大切なことでは選ばれていた「学問・研究をする」「将来に役立つ資格をとる」がほとんど選ばれなくなり，代わりに「友人とふれあう」「趣味を楽しむ」「のんびりする」が選ばれるようになる。比較的目立つのが，〈ケンゼン〉で「クラブ・サークル活動をする」ことを選び，〈ゲンキ〉で「恋愛をする」，〈テキトウ〉で「のんびりする」，〈マジメ〉で「趣味を楽しむ」ことが選ばれていることである。〈ケンゼン〉と〈ゲンキ〉は，友人や恋人とかかわることを幸せであると感じている傾向が強く，相対的に〈テキトウ〉と〈マジメ〉はそれを好まないと言える。

表1-2　類型×一番大切なこと　（%）

	学問	資格	ｻｰｸﾙ	のんびり	友人	恋愛	ボラ	ﾊﾞｲﾄ	消費	趣味	留学	旅	ほどほど	日々
ケンゼン	44	26	4	0	19	1	1	0	0	1	0	2	0	0
ゲンキ	26	25	6	4	22	1	1	1	0	3	3	3	4	1
テキトウ	25	20	3	9	14	3	0	2	1	10	1	2	9	1
マジメ	49	24	6	2	9	0	0	1	0	2	0	2	3	1

表1-3　類型×一番幸せなこと　（%）

	学問	資格	ｻｰｸﾙ	のんびり	友人	恋愛	ボラ	ﾊﾞｲﾄ	消費	趣味	留学	旅	ほどほど	日々
ケンゼン	2	0	14	12	30	12	0	0	3	23	0	4	0	0
ゲンキ	1	1	7	14	32	16	1	1	5	17	0	6	0	0
テキトウ	1	1	4	24	20	9	0	1	7	24	0	8	1	1
マジメ	6	2	6	18	25	9	1	0	0	28	0	3	0	2

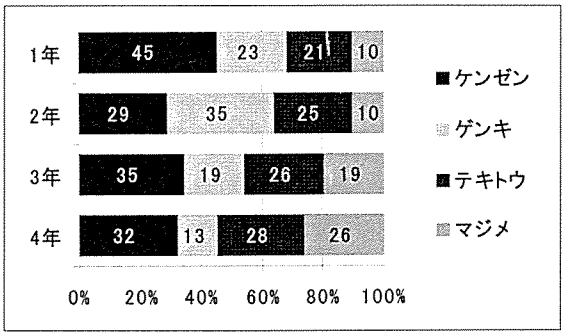

図1-2　学年別類型割合

以上の４類型を学年別に見たものが図1-2，性別・学年別に見たものが図1-3である。図1-2からは，１年生に〈ケンゼン〉が多く，学年進行とともに減少していくこと，その逆に〈テキトウ〉〈マジメ〉が学年進行とともに増加していく可能性が示唆される。ただし性別で様相は異なる。男性がおおむね上記のような傾向を示すのに対し，女性は３・４年で〈ケンゼン〉の割合が高くなっている。一般に男性よりも女性のほうが授業や交友関係に気を使っているが，ここでもそれが表れていると考えてよい。

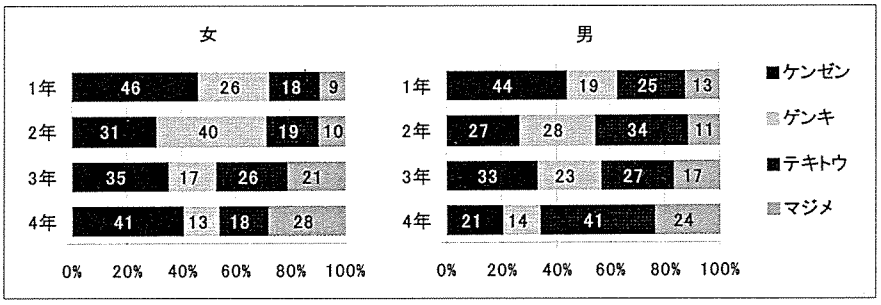

図1-3　学年別類型割合

４類型と入学時の希望との関係を示したのが，表1-4である。第１希望の者の比率は類型によってほとんど変化が見られないが，いわゆる不本意入学（「とりあえず受験したが，あまり入学したいとは思っていなかった」）はケンゼン以外ほぼ３割に上っている。

表1-4　類型×入学希望　（%）

	１番入学したいと思っていた	入学したいと思っていた学部・学科のひとつだった	とりあえず受験したが，あまり入学したいとは思っていなかった	その他
ケンゼン	30	50	18	2
ゲンキ	28	42	30	1
テキトウ	26	37	32	5
マジメ	30	42	27	1

次に，生活の充実の意識との関連についてである。全体としては，大学生活が「充実している」と答える者が16%，「だいたい充実している」と答える者が63%おり，合わせて79%が肯定的な回答をしている。授業の理解への肯定的な回答（「理解している」「だいたい理解している」）は72%，授業の満足についての肯定的な回答（「満足している」「だいたい満足している」）は59%となっている。授業の意味については，47%が「学問的能力を培うために必要」との回答を選択しており，「資格を得るために

必要」(23%),「卒業に必要な単位」(15%）を大きく引き離している。大学の授業に対する意識は，大学生活の充実感を規定していると考えることができる。授業に対して肯定的な回答をしている者のうち，生活が充実していると答える割合は92%であり，授業に対して否定的な回答をしている者が同様に答える割合（63%）を大きく上回っている。

溝上は学業が以前も今も学生生活にとって重要なものであることを指摘しているが，類型別に見ても「あまり充実していない」と答えるのは学業への意欲が低い〈テキトウ〉が多い（表1-5)。さらに〈テキトウ〉は授業の理解も低く（表1-6)，満足もしていない（表1-7)。また授業の意味は「卒業に必要な単位」と捉える者が比較的多い（表1-8)。一方，生活が充実していると答える者は〈ケンゼン〉〈ゲンキ〉が多い。とりわけ〈ケンゼン〉は授業満足・授業理解も高く，授業の意味についても「学問的能力を培うために必要」と答える者が多い。〈マジメ〉はほぼ中間的な意識を示しているが，授業を資格取得に意味づける者がやや少なくなっている（表1-8)。

表1-5　類型×生活充実　　(%)

	充実している	だいたい充実している	あまり充実していない	充実していない
ケンゼン	23	62	12	3
ゲンキ	20	64	15	1
テキトウ	5	61	29	6
マジメ	13	67	15	4

表1-6　類型×授業理解　　(%)

	理解している	だいたい理解している	あまり理解していない	理解していない
ケンゼン	10	69	20	1
ゲンキ	4	68	26	2
テキトウ	2	62	32	5
マジメ	4	68	24	4

表1-7　類型×授業満足　　(%)

	満足している	だいたい満足している	やや不満である	不満である
ケンゼン	3	61	29	6
ゲンキ	9	50	35	6
テキトウ	0	54	41	5
マジメ	4	51	32	12

表1-8　類型×授業意味　　(%)

	学問的能力を培うために必要	卒業に必要な単位	資格を得るために必要	一般教養として必要	なんの意味もない	その他
ケンゼン	56	9	25	9	0	1
ゲンキ	48	12	26	12	0	3
テキトウ	34	25	22	14	2	3
マジメ	44	19	17	13	4	2

類型区分に使用した設問は，実態を聞いたものではなく意識を聞いたものである。そのことに留意しつつ，学生の類型を仮説的に提起する。まず〈ケンゼン〉であるが，この類型はあたかも大学の案内パンフレットに登場するような，明るくてさわやかなキャンパスライフを体現しているかのようである。友人とふれあうことやサークル活動は，学生の本分とされることはないものの，否定的に見られることのない活動である。うがった見方をすれば，一般的に称揚される学生像に自分を合わせているともとることができる。1年生にこの類型が多いことからも，あるべき学生像を当てはめていると捉えることができる。

〈ゲンキ〉はこういった〈ケンゼン〉の持つ要素に加え，遊びや留学・旅など，あらゆることに積極

的な意識を持った類型であった。学年では2年生に多く，友人や恋愛など親密な関係性の構築に幸せを見出す外向的な態度が現れている。アルバイトや学外での交友関係など大学外で自己実現を見出すタイプも含まれると考える。

その対極に位置するのが〈マジメ〉である。この類型では「勉強」以外に積極的な意識を持っていない。しかしとりわけ授業に対して積極的なわけではなく，趣味に幸せを見出す割合も高い。ガリ勉やオタクと呼ばれる人々はこの類型の極端なタイプであると考えることができる。

〈テキトウ〉はあらゆることに積極的な意識を持っていない。それはつまりのんびりしたり適当にこなすことに積極的であるとも言える。また趣味やのんびりすることが一番大切と答える図太さを持っている。一方で不本意入学であったり，授業についていけなかったりして，大学生活に充実感を感じることができない層が多いことも読み取れ，何らかの支援が一番必要とされている類型とも考えることができる。

第2章 学生の生活と家族関係

第1節 親からの独立

学生生活に最も大きな影響を与えるのは「学びの場」が大学へと移行することよりも親元から離れて一人で暮らす，すなわち「一人暮らし」を始めることなのかもしれない。何故ならそれは食事・買い物・交通等生活の自立課題を必然的に強い両親からの独立を促すからである。

表2-1　学年性別家族居住地　（%）

性別	学年	鳥取市	鳥取県	中国地方	全国	無回答
女	1	35	14	25	26	0
	2	23	11	24	42	1
	3	19	17	23	41	0
	4	36	12	17	36	0
女 合計		28	14	23	35	0
男	1	32	13	23	30	1
	2	30	9	16	44	1
	3	22	8	23	45	2
	4	38	7	14	38	3
男 合計		29	10	20	39	2
総計		28	12	22	37	1

表2-1は学年別に家族居住地を鳥取市内，鳥取県内，中国地方内という地域エリアに区分して男女毎に示したものであるが，鳥取県内と鳥取県外の割合にはほとんど性差がみられないことが分かった。また，学年によって多少の違いはあるものの鳥取県内の出身者が3～4割を占めていることも認められた。更に4年生は鳥取市出身者が多く3・2年では減少するが再び1年生で増えており，そうした学年毎の傾向は男女とも共通した現象であることが分かった。

表2-2は，いわゆる自宅生と「一人暮らし」の割合を示したものであるが，表2-1の鳥取市出身者の割合と自宅生の割合について女子1～3年は同様な数値を示していることから，3年生までの女子学生においては鳥取市に自宅があれば自宅から大学に通っていることが分かった。しかし，4年生になると鳥取市出身学生の割合（36%）より自宅生の割合（43%）が増えている。これは鳥取県内の出身学生が引き起こした変化であろうが，大学での履修講義が少なくなることや地元就職活動の利便さ，果ては両親の経済的負担を軽減するための現象であることが推測される。一方，男子に関しては1年生の時は鳥取

市出身者と自宅生の割合が32％と同じなのに，それ以降は学年が上がる毎に自宅生の割合が減少しており，鳥取市に家族の居宅がありながらも離れて一人で生活している男子学生は学年が上がる毎に増え4年生ではその割合も1割以上に及ぶことが分かった。学生寮は男女とも1割に満たない。総じて一人暮らしをしている学生は学年・男女に多少の違いはあるものの全体総計値が示すように全体の約6割が「一人暮らし」をしているという実態が把握された。

表2-2　学年性別同居者　（％）

性別	学年	自宅	一人暮らし	学寮	その他	無回答
女	1	34	58	6	2	0
	2	25	69	2	4	0
	3	18	74	7	0	1
	4	43	50	5	2	0
女 合計		28	64	5	2	0
男	1	32	62	1	2	2
	2	24	71	1	3	1
	3	15	73	5	5	2
	4	24	66	3	3	3
男 合計		24	68	2	3	2
総計		27	66	4	2	1

表2-3　学年性別帰省の状況（1年生は予定）　※自宅以外の者のみ　（％）

性別	学年	ｺﾞｰﾙﾃﾞﾝｳｨｰｸ	夏休み	冬休み	春休み	その他	帰省せず
女	1	69	91	78	66	10	0
	2	55	88	83	82	22	4
	3	47	90	93	80	20	1
	4	42	83	83	75	21	0
	女計	56	89	84	76	18	1
男	1	52	81	67	50	4	2
	2	63	88	80	75	13	5
	3	40	90	86	76	20	2
	4	33	90	81	76	10	5
	男計	50	87	78	68	12	3
	総計	54	88	82	73	15	2

表2-3は「一人暮らし」の学生の独立度を計るために帰省経験を示したものであるが，これをみると帰省経験ゼロは全く少数派であり，表2-1に示されている中国地方を除く全国地域からの出身者割合からみても圧倒的に少ないことから，中国地方エリア外という距離の程度では帰省を控えるような態度は導き出され難いことが分かった。そこで帰省経験を男女別・学年毎にみてみると，男子より女子の方が若干多いものの，一人暮らしの学生の7～8割は大学の休業期間にほぼ毎回のように帰省している。但し，ゴールデンウィークでの帰省が学年を追う毎に減っているのは一人暮らしに慣れてきたことや鶴田（2001）が指摘する自立へと向かう「学生生活サイクル」に伴う現象として説明できよう。

次に，一人暮らしの学生が自宅にどの程度連絡をとっているかを尋ねた結果が表4に示されているが，「年に1～数回しか連絡をとらない」者が男子に若干多いもののそれ以外はほとんど性差が見られなかった。「週に1～数回」と「ほぼ毎日」を合わせると男女とも半数近くの学生が家族と連絡していることになる。連絡方法や内容については定かではないが，これで本当の独立生活と言えるのだろうか。一人暮らしと言いながら親から守られた入れ子細工の学生生活が想起された。

表2-4　学年性別家族連絡頻度　※自宅外生のみ　（%）

性別	学年	ほぼ毎日	週に1～数回	月に1～数回	年に1～数回	連絡をとらない	無回答
女	1	7	47	37	4	1	4
	2	14	40	43	2	0	1
	3	4	33	58	4	0	0
	4	9	42	43	3	1	2
	女計	2	47	42	7	3	0
男	1	6	40	38	16	0	0
	2	10	19	57	10	0	5
	3	5	40	43	11	2	1
	4	7	41	43	6	1	2
	男計						
	総計						

第2節　地域への志向性

鳥取という地域についての好悪感情を学年・性別で示したものが表2-5，更にそれを出身地域別にまとめたのもが表2-6である。これをみると「好きである」,「まあ好きである」という回答を合わせると男女とも学年に余り関係なく8割の学生が鳥取という地域に好意的感情を抱いていることが分かる。しかも男女とも鳥取市や鳥取県の出身者に「好きである」という割合が高いことから当地に好意的感情を持つ学生が地元大学への進学を選んだことが推測された。しかし,「好きである」に加えて「まあ好きである」を合わせると出身地域による違いは無くなり，特に男女とも中国地方の出身者の86%（女子）84%（男子）と鳥取市の出身者の87%（女子）80%（男子）が同水準の好意的感情を示していることから県外から来た学生にも鳥取という地域が好かれていることがうかがわれた。

表2-5　学年性別「鳥取好き」　（%）

性別	学年	好きである	まあ好きである	あまり好きでない	きらいである	何とも思わない	無回答
女	1	27	63	8	2	2	0
	2	26	53	10	5	4	2
	3	23	55	14	6	2	0
	4	36	55	5	2	0	2
	女計	26	57	10	4	2	1
男	1	35	46	6	2	7	2
	2	25	49	15	6	3	3
	3	25	45	17	5	7	2
	4	28	59	10	0	0	3
	男計	29	48	12	4	5	2
	総計	27	54	11	4	3	1

表2-6　出身性別「鳥取好き」　（%）

性別	家族居住地	好きである	まあ好きである	あまり好きでない	きらいである	何とも思わない	無回答
女	鳥取市	42	45	7	5	2	0
	鳥取県	29	53	10	4	2	2
	中国地方	18	68	13	0	1	0
	全国	18	62	10	5	3	2
	女計	26	57	10	4	2	1
男	鳥取市	45	35	8	5	5	1
	鳥取県	48	28	8	0	16	0
	中国地方	30	54	10	4	2	0
	全国	12	62	17	4	3	1
	男計	29	48	12	4	5	2
	総計	27	54	11	4	3	1

市出身者と自宅生の割合が32％と同じなのに，それ以降は学年が上がる毎に自宅生の割合が減少しており，鳥取市に家族の居宅がありながらも離れて一人で生活している男子学生は学年が上がる毎に増え4年生ではその割合も1割以上に及ぶことが分かった。学生寮は男女とも1割に満たない。総じて一人暮らしをしている学生は学年・男女に多少の違いはあるものの全体総計値が示すように全体の約6割が「一人暮らし」をしているという実態が把握された。

表2-2　学年性別同居者　（％）

性別	学年	自宅	一人暮らし	学寮	その他	無回答
女	1	34	58	6	2	0
	2	25	69	2	4	0
	3	18	74	7	0	1
	4	43	50	5	2	0
女 合計		28	64	5	2	0
男	1	32	62	1	2	2
	2	24	71	1	3	1
	3	15	73	5	5	2
	4	24	66	3	3	3
男 合計		24	68	2	3	2
総計		27	66	4	2	1

表2-3　学年性別帰省の状況（1年生は予定）　※自宅以外の者のみ　（％）

性別	学年	ｺﾞｰﾙﾃﾞﾝｳｨｰｸ	夏休み	冬休み	春休み	その他	帰省せず
女	1	69	91	78	66	10	0
	2	55	88	83	82	22	4
	3	47	90	93	80	20	1
	4	42	83	83	75	21	0
	女計	56	89	84	76	18	1
男	1	52	81	67	50	4	2
	2	63	88	80	75	13	5
	3	40	90	86	76	20	2
	4	33	90	81	76	10	5
	男計	50	87	78	68	12	3
	総計	54	88	82	73	15	2

表2-3は「一人暮らし」の学生の独立度を計るために帰省経験を示したものであるが，これをみると帰省経験ゼロは全く少数派であり，表2-1に示されている中国地方を除く全国地域からの出身者割合からみても圧倒的に少ないことから，中国地方エリア外という距離の程度では帰省を控えるような態度は導き出され難いことが分かった。そこで帰省経験を男女別・学年毎にみてみると，男子より女子の方が若干多いものの，一人暮らしの学生の7～8割は大学の休業期間にほぼ毎回のように帰省している。但し，ゴールデンウィークでの帰省が学年を追う毎に減っているのは一人暮らしに慣れてきたことや鶴田（2001）が指摘する自立へと向かう「学生生活サイクル」に伴う現象として説明できよう。

次に，一人暮らしの学生が自宅にどの程度連絡をとっているかを尋ねた結果が表4に示されているが，「年に1～数回しか連絡をとらない」者が男子に若干多いもののそれ以外はほとんど性差が見られなかった。「週に1～数回」と「ほぼ毎日」を合わせると男女とも半数近くの学生が家族と連絡していることになる。連絡方法や内容については定かではないが，これで本当の独立生活と言えるのだろうか。一人暮らしと言いながら親から守られた入れ子細工の学生生活が想起された。

表2-4　学年性別家族連絡頻度　※自宅外生のみ　（%）

性別	学年	ほぼ毎日	週に1～数回	月に1～数回	年に1～数回	連絡をとらない	無回答
女	1						
	2	7	47	37	4	1	4
	3	14	40	43	2	0	1
	4	4	33	58	4	0	0
	女計	9	42	43	3	1	2
男	1						
	2	2	47	42	7	3	0
	3	6	40	38	16	0	0
	4	10	19	57	10	0	5
	男計	5	40	43	11	2	1
	総計	7	41	43	6	1	2

第２節 地域への志向性

鳥取という地域についての好悪感情を学年・性別で示したものが表2-5，更にそれを出身地域別にまとめたのもが表2-6である。これをみると「好きである」,「まあ好きである」という回答を合わせると男女とも学年に余り関係なく８割の学生が鳥取という地域に好意的感情を抱いていることが分かる。しかも男女とも鳥取市や鳥取県の出身者に「好きである」という割合が高いことから当地に好意的感情を持つ学生が地元大学への進学を選んだことが推測された。しかし,「好きである」に加えて「まあ好きである」を合わせると出身地域による違いは無くなり，特に男女とも中国地方の出身者の86%（女子）84%（男子）と鳥取市の出身者の87%（女子）80%（男子）が同水準の好意的感情を示していることから県外から来た学生にも鳥取という地域が好かれていることがうかがわれた。

表2-5　学年性別「鳥取好き」　（%）

性別	学年	好きである	まあ好きである	あまり好きでない	きらいである	何とも思わない	無回答
女	1	27	63	8	2	2	0
	2	26	53	10	5	4	2
	3	23	55	14	6	2	0
	4	36	55	5	2	0	2
	女計	26	57	10	4	2	1
男	1	35	46	6	2	7	2
	2	25	49	15	6	3	3
	3	25	45	17	5	7	2
	4	28	59	10	0	0	3
	男計	29	48	12	4	5	2
	総計	27	54	11	4	3	1

表2-6　出身性別「鳥取好き」　（%）

性別	家族居住地	好きである	まあ好きである	あまり好きでない	きらいである	何とも思わない	無回答
女	鳥取市	42	45	7	5	2	0
	鳥取県	29	53	10	4	2	2
	中国地方	18	68	13	0	1	0
	全国	18	62	10	5	3	2
	女計	26	57	10	4	2	1
男	鳥取市	45	35	8	5	5	1
	鳥取県	48	28	8	0	16	0
	中国地方	30	54	10	4	2	0
	全国	12	62	17	4	3	1
	男計	29	48	12	4	5	2
	総計	27	54	11	4	3	1

表2-7　学年性別居住意思　（%）

性別	学年	住んでいたい	移りたい	どちらでもよい	分からない	無回答
女	1	15	37	28	20	0
	2	6	48	32	13	2
	3	9	50	31	10	0
	4	24	36	38	2	0
	女計	12	43	31	13	1
男	1	18	37	26	18	1
	2	13	46	26	13	3
	3	12	42	27	18	2
	4	24	24	41	7	3
	男計	16	39	28	15	2
	総計	13	42	30	14	1

表2-8　出身性別居住意思　（%）

性別	学年	住んでいたい	移りたい	どちらでもよい	分からない	無回答
女	鳥取市	29	31	30	10	0
	鳥取県	22	27	41	8	2
	中国地方	1	49	29	21	0
	全国	2	54	30	14	1
	女計	12	43	31	13	1
男	鳥取市	27	27	35	11	0
	鳥取県	36	24	28	12	0
	中国地方	12	50	24	14	0
	全国	4	49	26	20	1
	男計	16	39	28	15	2
	総計	13	42	30	14	1

では，学生達に鳥取という地域で定住する意思はあるのだろうか。それについて尋ねた結果を学年・性別で示したものが表2-7，更にそれを出身地域別にまとめたものが表2-8である。結果は女子学生に関しては1年で15%，2年で6%，3年で9%，4年で24%が，男子学生に関して1年で18%，2年で13%，3年で12%，4年で24%が定住の意思を示し，いずれも2年・3年で低減するものの4年で再び上昇していくことが特徴として挙げられた。そこで，この結果を出身地域別に調べてみると男女とも定住の意思を示した学生が県外の出身者では1割に満たないのに対して，鳥取市あるいは鳥取県の出身者の約3割が定住の意思を示していることから地元出身学生の定住志向の強さが浮き彫りとなった。しかし，全体的傾向からすれば「どちらでもよい」・「わからない」を加えると4割以上になることから未来的時間軸において自己の活動エリアを設定すること自体困難な課題であったとも推測できよう。いずれにせよ前述した結果と併せて考察すれば，鳥取という地域は県外から来た学生に愛されているようだが将来的に当地を活動のエリアと考えたり定住の地として対象化されるには至っていないということが認められた。

第3節 対人関係

学生の自立にとって友達は大きな影響力を持つ。特にアイデンティティの確立においてはモデルとなることもあるし一人暮らしのよき支援者，Erikson（1982）によれば前成人期の発達課題としての「親密と孤立」という心理・社会的危機を打開していく手段として友情・性愛・競争・協力におけるパートーを持つことは重要な関係的要素であるからだ。

表2-9　学年性別友人数　（%）

性別	学年	1人	2～4人	5～9人	10人以上	いない	無回答
女	1	0	11	16	72	0	1
	2	0	2	27	67	1	3
	3	0	4	22	73	0	1
	4	0	7	26	64	0	2
女 合計		0	6	22	70	0	2
男	1	2	17	20	56	4	1
	2	1	11	21	63	3	1
	3	0	3	25	68	2	2
	4	0	3	34	59	0	3
男 合計		1	10	23	61	2	2
総計		0	8	22	67	1	2

表2-9は友達の有無・数を尋ねた結果を男女別・学年別に示したものであるが,「友達がいない」と答えた学生は5％未満でほとんどの学生が「友達がいる」と答えていた。しかも男子61%，女子70%の学生がその数を「10人以上」と表明しており過半数以上が多くの友達に包まれて生活しているようだ。「10人以上」の友達を持つ割合を学年毎・性差によって調べてみると女子の1年は男子の1年に比べて16%も多いことから新規な環境においてもすぐに友達を作ることができる女子学生の社会性の高さが読みとれる。また4年になると男女とも「10人以上」の友達を持つ割合が減少することから友達の絞り込みがなされたとものと推測される。

表2-10　類型別友人数　（%）

	1人	2～4人	5～9人	10人以上	いない
ケンゼン	0	5	20	75	0
ゲンキ	1	5	20	74	1
テキトウ	0	14	25	60	1
マジメ	1	10	32	53	3

表2-10は表2-9で示した結果を第1章で示した学生の4分類〈ケンゼン〉〈ゲンキ〉〈テキトウ〉〈マジメ〉にまとめ直したものであるが，〈ケンゼン〉と〈ゲンキ〉タイプがほぼ同じような数値を示しており，〈テキトウ〉と〈マジメ〉が同じような傾向があることが分かる。しかし〈ケンゼン〉において「10人以上」の友達を持つ割合が高いのは何事にも積極的であるため多様な仲間集団が形成されたためと推測できるが，〈ゲンキ〉において「10人以上」の友達を持つ割合が高いのは遊び志向の強さから遊び仲間が中心となっていると推測されよう。また，これら4タイプにおいて「10人以上」の友達を持つ割合が最も低い高い〈マジメ〉は学問志向の強さのみを特徴とするタイプであるがもはや大学において学問という活動だけでは友達は多く作れないということであろうか。それともこうしたタイプは対人関係の面で低い社会性を示す学生が多く含んでいるのかも知れない。

表2-11は「友達」の概念から更に絞って「親友」の有無を尋ねた結果を学年別・性別にまとめたものでそれを先の4タイプに分けてまとめたものが表2-12である。これをみると性差・学年差に違いはほとんどなく8割以上の学生が「親友」を持っていることが分かった。親友を持つ割合が最も高いのが〈ケンゼン〉であつたことはこのタイプの学生が学問・遊び・サークル・ボランティアなど多方面の活動に熱心であることの表れなのだろうか。一方，ここにおいても学問志向のみが強い〈マジメ〉の学生は他のタイプの学生より親友を持つことが低く示されていた。

表2-11　学年性別親友の有無　（%）

性別	学年	いる	いない	無回答
女	1	89	11	1
	2	87	9	4
	3	85	15	0
	4	88	12	0
女 合計		87	11	1
男	1	88	11	1
	2	76	23	1
	3	83	14	3
	4	83	14	3
男 合計		82	16	2
総計		85	13	2

表2-12　類型別親友の有無　（%）

	いる	いない
ケンゼン	92	8
ゲンキ	89	11
テキトウ	81	19
マジメ	78	22

表2-13　学年性別恋人の有無　（%）

性別	学年	いる	いない	無回答
女	1	18	82	0
	2	40	56	4
	3	54	46	0
	4	55	45	0
女 合計		37	61	1
男	1	15	84	1
	2	21	78	1
	3	38	58	3
	4	52	48	0
男 合計		27	72	2
総計		33	66	1

表2-14　類型別恋人の有無　（%）

	いる	いない
ケンゼン	34	66
ゲンキ	37	63
テキトウ	31	69
マジメ	32	68

表2-13は恋人の有無を男女別・学年別に示したもので，それを先の4タイプに分けてまとめた直したものが表2-14である。これをみると先ず1年では女子18%，男子15%とほぼ同様な数値を示しているにもかかわらず，2年では女子40%，男子21%となり以後どちらも上昇し4年では女子55%，男子52%が「恋人がいる」と答えていることから女子学生は早くから「恋人＝異性の友達」を持つ傾向にあるが男子学生は随分時間をかけて恋人に巡り会っていることが分かる。更に，遊び志向の強い〈ゲンキ〉が若干他のタイプにより高いものの，4タイプでの差は6%以内に収まっていることから恋人の有無と学生類型には関連が無いと言えよう。

表2-15　学年性別同棲割合　（%）

性別	学年	している	していない	無回答
女	1	9(2名)	91	0
	2	15(6名)	83	2
	3	15(8名)	85	0
	4	26(6名)	74	0
女 合計		16	84	1
男	1	0	92	8
	2	6(1名)	94	0
	3	13(3名)	87	0
	4	0	100	0
男 合計		6	93	1
総計		12(26名)	87	1

※恋人がいないのに同棲していると答えた者が女19名，男10名

表2-16　類型別同棲割合　（%）

	している	していない
ケンゼン	13(10名)	87
ゲンキ	5(3名)	95
テキトウ	15(7名)	85
マジメ	21(6名)	79

表2-15は恋人との生活形態として同棲の有無について男女別・学年別に示したもので，それを先の4タイプに分けてまとめた直したものが表2-16である。女子は学年が上がる毎に同棲率が上昇しており異性との親密度の高まりを予測させる。4タイプのよる割合で見ると〈マジメ〉が最も高く，次に〈テキトウ〉，次に〈ケンゼン〉，最後に〈ゲンキ〉となる。すなわち，学問的志向のみが強い〈マジメ〉が最も高く，遊び志向の強い〈ゲンキ〉が最も低いのである。恋人として生活を共にするということは現代の学生にとって「恋愛ごっこ」遊びでなく，もはや現実的でまじめな行為の選択なのだろうか。

第4節 悩み・不安

表2-17　学年性別不安の有無　（%）

性別	学年	ある	ない	無回答
女	1	85	15	1
	2	87	12	1
	3	97	3	0
	4	93	7	0
女 合計		90	10	1
男	1	91	7	1
	2	74	24	3
	3	90	8	2
	4	90	10	0
男 合計		85	13	2
総計		88	11	1

表2-18　類型別不安の有無（%）

	ある	ない
ケンゼン	93	7
ゲンキ	84	16
テキトウ	85	15
マジメ	90	10

表2-17は不安や悩みの有無について男女別・学年別に示したもので，それを先の4タイプに分けてまとめた直したものが表2-18である。これをみると2年男子74%を除いてほとんどの学年・男女で約9割の学生が「不安や悩みがある」と答えていることが分かる。まさに大学生活は悩みと苦悩の時代ということを象徴するかのような高い数値である。そこでこれを先の4タイプに分けて不安や悩みが高い順に並べてみると，〈ケンゼン〉〈マジメ〉〈テキトウ〉〈ゲンキ〉となる。これは種々の活動や学問に専念することは悩みをもたらすが，気まま志向や遊び志向の強いタイプは不安を感じにくいという常識的な判断が確認されたと言えよう。

表2-19　学年性別不安内容　（%）

性別	学年	授業など学業について	友人等との対人関係について	異性の問題について	性格について	人生について	課外活動について	就職や将来の進路について	健康について	経済問題（家計・学費・ローン等）について	家族や家庭内のことについて	その他	ミス	無回答
女	1	37	16	2	2	2	0	12	2	3	0	2	6	1
	2	13	6	5	3	9	5	24	1	5	0	5	10	3
	3	6	2	0	3	6	5	64	1	2	3	0	5	0
	4	0	2	5	2	5	0	62	0	0	0	0	17	0
女 合計		18	8	2	3	5	3	35	1	3	1	2	8	1
男	1	46	13	1	4	2	0	9	4	2	1	1	7	1
	2	16	5	1	1	14	5	9	0	5	0	4	16	1
	3	2	3	0	2	12	8	32	0	10	2	5	15	0
	4	3	0	0	0	7	0	55	0	3	7	0	14	0
男 合計		21	7	1	2	9	4	20	1	5	2	3	13	1
総計		22	8	2	3	8	3	32	1	4	1	3	11	1

表2-20　類型別不安内容　　（%）

	授業など学業について	友人等との対人関係について	異性の問題について	性格について	人生について	課外活動について	就職や将来の進路について	健康について	経済問題（家計・学費・ローン等）について	家族や家庭内のことについて	その他	ミス	無回答
ケンゼン	25	9	2	2	6	6	30	1	3	0	3	11	1
ゲンキ	17	10	5	4	7	3	34	2	5	1	3	9	1
テキトウ	22	9	0	3	8	1	32	2	6	2	4	11	0
マジメ	20	4	0	2	12	2	38	0	5	2	0	12	1
総計	22	9	2	3	8	3	33	1	5	1	3	11	1

表2-19は不安や悩みの内容について男女別・学年別に示したもので，それを先の4タイプに分けてまとめた直したものが表2-20である。これをみると，まず学業についての悩みが男女とも1年で最も高く2年以降は急減していることが分かる。これは溝上ら（2001）が指摘しているように大学の学びへの抵抗であり Horizontal Transition の問題であろう。また，これと同様な推移を示しているが対人関係での悩みであるが，これに関しては学ぶ集団が流動的で幾つもの対人関係が設定されている大学における環境適応すなわち Vertical Transition の問題として指摘できよう（南博文・山口修司，1992）。それとは反対に，学年が上がる毎に上昇しているのが就職や進路についての悩みで，次なる Horizontal Transition の問題が意識されている状況を示している。そしてこの推移を男女別に辿ると男子より女子の方が早い段階で高い数値を示していることから女子学生の現実的認識の高さが予兆できる。また，男女とも2・3年で「人生について」の悩みを指摘する者が高いのは立花（1988）が指摘した，この年代が「空白の時代」であることを裏付けよう。不安・悩みと先の4タイプとの関連については〈ケンゼン〉に関しては学業の悩みが，〈マジメ〉に関しては人生についての悩みが最も高いことが特徴として挙げられた。

第3章 授業外での学生の生活とまなび

第1節 学内でのまなび

まず，学内でのまなびの代表的な場である図書館の利用傾向をみてみよう。週に2回以上利用するのは，2，3年生で2割程度，4年生で2～3割程度である。特に男子は4年生でも3割弱で女子に比べて10ポイント低い。ただし，これがこの学年特有の傾向なのかどうかは，経年変化等をみる必要がある。クラスター分析結果をみると，〈マジメ〉の利用率が高く，約4割が週に2回以上利用している。それに続くのが，〈ケンゼン〉である。〈テキトウ〉はほとんど図書館を利用せずに日頃のまなびをこなしていると言えよう。〈ゲンキ〉もそれに近い傾向である。

次に，学生のもうひとつの生活の場であり，まなびの場であるサークル活動についてみてみよう。サークル加入割合は，2年生では男女がほぼ同じで6割程度，3年生では男子の加入割合が7割弱と女子を13ポイント上回っている。4年生では男女ともにほぼ6割の加入割合となっている。全体的にみれば，過半数がサークル活動をしていることになる。鳥取大学では，3年生前期あたりまでにサークル活動での主たる役割を終え，「引退」と言われる立場になるのが3年生後期からであると言われる。しかしながら，4年生にも「サークルをしている」という意識は継続されていることがわかる。

一方，クラスター分析結果では，サークル活動をしているか否かが分かれている。〈ケンゼン〉〈ゲンキ〉は7割以上がサークル活動をしているが，〈マジメ〉は5割強，〈テキトウ〉は5割を割り込む

表3-1　学年性別一週間当たり図書館利用回数（２～４年）　（%）

性別	学年	ほとんど利用しない	１回程度	２回程度	３回以上	無回答
女	2	44	34	13	8	2
	3	41	37	11	11	0
	4	37	27	15	22	0
女 合計		41	34	12	12	1
男	2	36	33	14	18	0
	3	47	35	13	5	0
	4	55	17	3	24	0
男 合計		43	31	12	14	0
総計		42	33	12	13	0

表3-2　類型別図書館一週間当たり図書館利用回数（２～４年）　（%）

類型	ほとんど利用しない	１回程度	２回程度	３回以上
ケンゼン	39	33	16	13
ゲンキ	41	39	10	10
テキトウ	56	26	9	8
マジメ	32	29	15	24

表3-3　学年性別サークル加入割合（２～４年）　（%）

性別	学年	している	していない	無回答
女	2	64	34	2
	3	54	46	0
	4	62	36	2
女 合計		60	39	1
男	2	65	35	0
	3	67	33	0
	4	59	41	0
男 合計		64	36	0
総計		62	38	1

表3-4　類型別サークル加入割合（2～4年）（%）

類型	している	していない
ケンゼン	72	28
ゲンキ	72	28
テキトウ	44	56
マジメ	55	45

という結果である。

第２節 学外でのまなび

さて，学外でのまなびの場としてアルバイト状況，そして利用したことのある施設をみてみよう。まず，アルバイト状況については，「常時している」「時々している」を「している」として考えると，２年生は男女ともに約７割が，３年生は約８割がアルバイトをしている。特に「常時している」では，女子のほうが男子よりも２年生で16ポイント，３年生で９ポイント高くなっている。全体的に女子のほうが男子よりもアルバイトに熱心であることがうかがえる。４年生ではアルバイトを「している」割合でも，男女で差が出ており，女子のほうが男子よりも約10ポイント高く，７割を超えている。ただし，「全くしていない」のは女子のほうが７ポイント高い結果となっている。女子は，アルバイトをするのかしないのかを男子よりははっきりと決めているようにみえる。

クラスター分析では，〈ゲンキ〉が最もアルバイトを「している」割合が高く，８割以上になる。続いて，〈ケンゼン〉〈テキトウ〉が７割を超えている。一方で，〈マジメ〉では６割に満たず，「全くしていない」割合も３割近くになる。

表3-5　学年性別アルバイトの頻度（2～4年）　（%）

性別	学年	常時している	時々している	ほとんどしていない	全くしていない	無回答
女	2	47	26	8	20	0
	3	56	27	10	7	0
	4	48	26	7	17	2
女 合計		51	26	9	14	0
男	2	31	39	11	18	1
	3	47	33	10	10	0
	4	48	17	24	10	0
男 合計		40	33	13	14	1
総計		46	29	10	14	0

表3-6　類型別アルバイトの頻度（2～4年）　（%）

類型	常時している	時々している	ほとんどしていない	全くしていない
ケンゼン	53	24	11	12
ゲンキ	50	35	7	9
テキトウ	46	31	11	12
マジメ	30	27	15	28

次に利用したことのある施設をみてみよう。どの学年でも，男女を問わずに利用したことのある施設は，カラオケ，図書館，ゲームセンターの3つである。また，3年生，4年生に比べると，2年生は全体的に利用したことのある施設の割合が低めである。これは，在学年数があがればそれだけ，利用する機会が多いことがあるからだろう。男女差についてみると，10ポイント以上の差で利用したことのある割合が高い施設は女子に多い。それをさらに学年別にみると，2年生では，温泉，映画館，博物館等，舞台等，動物園等，遊園地の6つで，3年生では，図書館，映画館，舞台等，遊園地の4つで，4年生では，図書館，映画館，博物館等，動物園等の4つで女子が男子よりも利用している。特に映画館はどの学年でも女子のほうが高い。逆に男子が女子よりも10ポイント以上の差で利用が高いのは，3年生の海水浴場と，すべての学年のパチンコだけである。これらから全体的傾向として，女子のほうが施設利用は幅広いことがわかる。

次にクラスター分析の結果では，すべてに共通して利用したことがある割合が7割以上であるのは，図書館と」カラオケである。図書館は類型間に差がなく8割前後である。カラオケは，〈ケンゼン〉〈ゲンキ〉〈テキトウ〉が9割を超え，〈マジメ〉が8割近い。図書館とカラオケは学生生活になくてはならない施設のようである。これらに続くのが，どのクラスターも7割前後の映画館，温泉である。ゲームセンターは，〈マジメ〉が6割程度だが，他のクラスターは7割以上の利用がある。逆にどのクラスターでも利用の低い施設はパチンコである。

クラスター別にまとめてみると，〈ケンゼン〉は，カラオケを最もよく利用し，図書館，映画館，温泉，ゲームセンターもよく利用し，パチンコにはあまり行っていない。〈ゲンキ〉は，カラオケを筆頭に，ゲームセンター，図書館，映画館をよく利用し，パチンコにはあまり行っていない。〈テキトウ〉は，カラオケを筆頭に，図書館，ゲームセンターを比較的よく利用し，2割を切る利用施設はない。〈マジメ〉は図書館，カラオケ，温泉，映画館を比較的よく利用するが，スキー場，パチンコにはあまり行かない。〈ゲンキ〉と〈テキトウ〉の利用施設傾向は比較的似ている。

表3-7　学年性別利用したことのある施設〈女子〉　（%）

学年	カラオケ	図書館	ｹﾞｰﾑｾﾝﾀｰ	温泉	映画館	海水浴場	博物館等	講演会	舞台等	スキー場	動物園等	遊園地	パチンコ
2	89	72	67	61	59	38	36	34	39	29	22	18	2
3	96	88	82	80	87	41	55	49	53	31	39	45	11
4	90	90	73	88	90	78	80	71	56	41	51	44	24

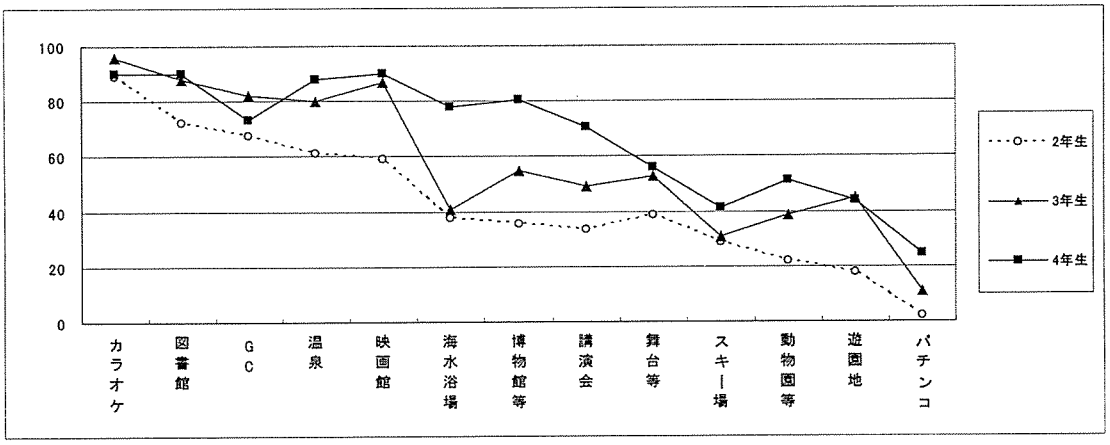

図3-1　学年性別利用したことのある施設〈女子〉

表3-8　学年性別利用したことのある施設〈男子〉　（%）

学年	カラオケ	図書館	ｹﾞｰﾑｾﾝﾀｰ	温泉	映画館	海水浴場	博物館等	講演会	舞台等	スキー場	動物園等	遊園地	パチンコ
2	81	79	65	49	44	29	26	28	29	25	11	8	23
3	93	75	78	77	73	62	48	48	37	40	37	30	32
4	97	79	76	83	79	69	59	69	55	48	21	41	38

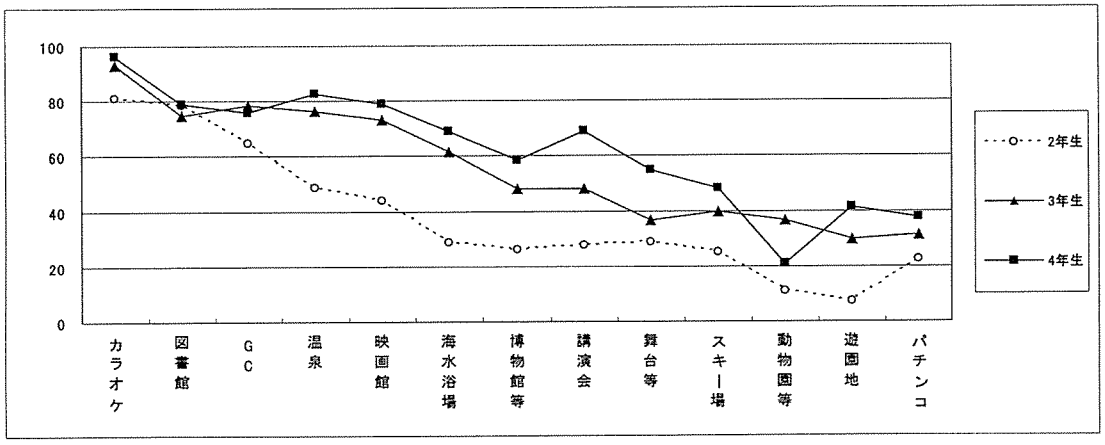

図3-1　学年性別利用したことのある施設〈男子〉

表3-9　類型別利用したことのある施設

類型	カラオケ	図書館	ｹﾞｰﾑｾﾝﾀｰ	温泉	映画館	海水浴場	博物館等	講演会	舞台等	スキー場	動物園等	遊園地	パチンコ
ケンゼン	97	82	77	75	75	58	53	58	44	36	36	34	15
ゲンキ	93	78	80	65	69	47	38	36	41	41	26	25	18
テキトウ	90	79	72	67	65	37	43	33	41	31	24	29	25
マジメ	78	81	61	70	69	43	51	48	46	16	30	27	10

第3節 自分を変えるできごととの遭遇

大学に入学してから，自分を変えるような出来事に遭遇した割合をみてみよう。男女ともに4年生が「あった」と回答している割合が高く7割以上である。2年生では女子のほうが，「あった」割合が20ポイント近く高く7割近い。3年生では男女ともに「あった」が6割近い。在学年数が長いほうが自分を変える出来事に遭遇する機会が多いと考えられるが，女子は2年生のほうが3年生よりも遭遇割合が高くなっている。

クラスター分析でみると，〈ケンゼン〉〈ゲンキ〉が「あった」が7割を超えているが，〈テキトウ〉は4割程度，〈マジメ〉が5割強となっている。

表3-10　学年性別自分を変える出来事　（%）

性別	学年	あった	なかった	無回答
女	2	67	30	3
	3	57	43	0
	4	81	17	2
女 合計		65	33	2
男	2	48	53	0
	3	58	42	0
	4	76	24	0
男 合計		56	44	0
総計		62	37	1

表3-11　類型別自分を変える出来事　（%）

類型	あった	なかった
ケンゼン	75	25
ゲンキ	71	29
テキトウ	43	57
マジメ	56	44

では，何（誰）によって自分を変える出来事があったのだろうか。その要因は，サークルが28%，友達が21%，恋人が16%で他の要因を圧倒している。クラスター別でみると，サークル加入割合が低かった〈テキトウ〉と〈マジメ〉は，自分を変える出来事が「あった」割合も低い。また，2年生で19ポイント，女子のほうが自分を変える出来事が「あった」と回答した割合が男子より高い。サークル加入割合でみると，2年生での男女差はないが，女子だけでみれば，2年生が3年生を10ポイント上回っている。これらのことから，自分を変える出来事の一因としてのサークル活動をあげることができよう。

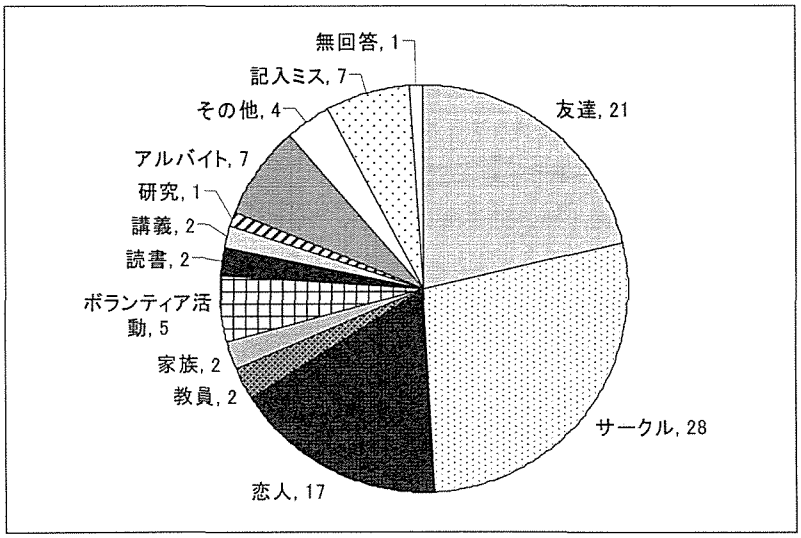

図3-3　何に・誰によって自分を変える出来事が生じたか　（%）

第4節 まとめ

最後に，クラスター別に全体をまとめてみると，次のような授業外でのまなびと生活が浮かび上がる。

〈ケンゼン〉の約3割は週2回以上図書館に通い，7割はサークルで活動し，7割は常時または時々アルバイトをし，カラオケ，ゲームセンター，温泉，映画館を比較的利用することが多いという，「学内外ともに幅広くよく出かけ，人とよく交わる大学生活」を過ごしている。そうした環境のなかで，自分を変える出来事にも75%が遭遇している。

〈ゲンキ〉は，約2割が週2回以上図書館に通い，7割がサークルで活動し，8割以上が常時または時々アルバイトをし，カラオケ，ゲームセンターの利用が比較的多い，〈ケンゼン〉ほど「幅広くはないが，よく出かけ，人と交わることの多い大学生活」を過ごしている。そうしたなかで，自分を変える出来事に71％が遭遇している。

〈テキトウ〉は，週2回以上図書館へ行くのは2割に満たず，サークル活動している割合も4割程度で最も低いが，アルバイトは7割以上が常時または時々し，カラオケ，ゲームセンターの利用が多い，「学外での活動が比較的多い大学生活」を過ごしている。アルバイトで人と交わることが多くてもサークルの加入割合が低いことが影響しているためか，上述のように，自分を変える出来事に遭遇したことがあったのは43％と，〈ケンゼン〉〈ゲンキ〉に比べるとかなり低い。

〈マジメ〉は，4割程度は週2回以上図書館に通い，5割強がサークルで活動しているが，常時または時々アルバイトをしている割合は6割に満たず，全くしていない割合も3割近く，利用する施設はカラオケ，温泉などであるという，「学内中心の大学生活」を過ごしている。自分を変える出来事に遭遇している割合は，〈テキトウ〉よりは13ポイント高く56％だが，学内中心で人と交わることの多いアルバイトをしている割合が低いためか，〈ケンゼン〉〈ゲンキ〉に比べると低くなっている。

第4章 学生の社会意識

第1節 政治や社会への関心

「あなたは政治や社会の出来事に対して関心があるほうですか」という質問に対して，全体の75％が「そう思う」「まあそう思う」と回答し，「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した無関心層は24％であった。全学年を通じて，女子よりも男子のほうが関心をもっている。特に4年男子は86％が「そう思う」「まあそう思う」と回答し，無関心層はわずか10％である。

一方，新聞や書籍の購読率は高いとはいえない。新聞（インターネット新聞を含む）をほぼ毎日読むのは29％にすぎず，週数回が20％，週1回程度が14％，ほとんど新聞を読まない，あるいは全く読まない学生が36％いる。書籍代（雑誌を含まない）に月5000円以上かけているのはわずか4％であり，2000円以上5000円未満が16％である。2000円未満と回答した者も含めると58％は定期的に書籍を購入しているが，42％の学生はほとんど書籍を買っていない。活字離れの傾向が顕著にあらわれているといえよう。

表4-1　学年性別政治・社会への関心

「あなたは政治や社会の出来事に対して関心があるほうですか」に対する回答　（％）

性別	学年	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
女	1	11	61	26	2	1
	2	13	55	25	4	3
	3	9	68	22	1	0
	4	12	64	24	0	0
女 合計		11	62	24	2	1
男	1	22	56	20	1	1
	2	26	49	20	4	1
	3	23	57	18	2	0
	4	34	52	7	3	3
男 合計		25	53	18	2	1
総計		17	58	22	2	1

表4-2　学年性別新聞を読む頻度

「あなたは，どのくらいの頻度で新聞（インターネット新聞を含む）を読みますか」に対する回答　（%）

性別	学年	ほぼ毎日	週数回	週1回程度	ほとんど読まない	全く読まない	無回答
女	1	23	21	9	37	10	0
	2	26	11	10	38	13	3
	3	25	18	19	30	8	0
	4	40	14	19	19	7	0
女 合計		26	17	13	33	10	1
男	1	30	22	15	26	6	1
	2	29	31	11	21	6	1
	3	38	22	13	18	8	0
	4	45	10	24	17	3	0
男 合計		33	24	14	22	6	1
総計		29	20	14	28	8	1

クラスター別に見ると，〈ケンゼン〉と〈マジメ〉は，約8割が政治や社会への関心を示している。特に〈マジメ〉は新聞をよく読んでおり，第3章でみたとおり図書館の利用率も高い。一方，〈ケンゼン〉は新聞を読む頻度が4つのクラスターのうちもっとも低く，書籍の購入も多くない。また，〈テキトウ〉は政治や社会への関心が他に比べて低いが，だからといって新聞や書籍を読んでいないわけではない。政治や社会への関心と新聞や書籍の利用は，かならずしも比例していないようだ。ちなみに，〈ゲンキ〉は他のクラスターに比べて書籍の購入がやや少なく，図書館の利用率も高くない。

新聞や書籍の購読率が低いにもかかわらず政治や社会への関心が全体的に高いのは，学生が他のメディアを通じて政治や社会に関する情報を得ているということを示しているのか，あるいは関心があっても積極的に情報を求めるわけではないということなのか，このあたりの検証が今後必要であると思われる。

表4-3　学年性別書籍購入費用（月額）

「あなたが1ヶ月に購入する書籍（雑誌は含まない）にかかる費用はどのぐらいですか」に対する回答　（%）

性別	学年	ほとんど買わない	2,000円未満	2,000〜5,000円	5,000円以上	無回答
女	1	41	46	11	2	1
	2	46	38	12	1	4
	3	46	37	14	2	1
	4	33	40	21	5	0
女 合計		43	41	13	2	2
男	1	29	35	26	9	1
	2	46	33	15	5	1
	3	48	33	18	0	0
	4	34	38	14	14	0
男 合計		40	34	19	6	1
総計		42	38	16	4	1

表4-4　類型別政治・社会への関心　（%）

類型	大いに関心がある	ある程度関心がある	あまり関心がない	全く関心がない	無回答
ケンゼン	20	59	19	2	0
ゲンキ	16	58	21	3	1
テキトウ	11	55	31	3	0
マジメ	19	59	19	1	2

表4-5　類型別新聞を読む頻度　（%）

類型	ほぼ毎日	週数回	週1回程度	ほとんど読まない	全く読まない
ケンゼン	23	21	14	33	8
ゲンキ	29	19	18	25	10
テキトウ	34	17	9	32	7
マジメ	36	23	11	19	11

表4-6　類型別書籍の購入状況　（%）

類型	ほとんど買わない	2000円未満	5000円未満	5000円以上
ケンゼン	40	39	17	4
ゲンキ	41	46	12	1
テキトウ	49	30	16	5
マジメ	40	37	17	6

第2節 社会変革意識

自分の努力によって社会が変わると思うか否かをたずねた質問では，「そう思う」「まあそう思う」と回答した学生と「あまりそう思わない」「思わない」と回答した学生は全体ではほぼ半数ずつであった。だが，学年があがるにつれて「あまりそう思わない」「思わない」と回答する学生の比率があがっていく傾向が見てとれる。男女別に見ると，ここでもやはり女子のほうが悲観的であるが，社会が不公平であることを痛感しながらも36%が努力によってそれを変えられると考える前向きさを持っていることは，男子に比べて〈ケンゼン〉の占める割合が高いことと関係しているのではないかと思われる。

クラスター別では，〈ケンゼン〉〈ゲンキ〉が「そう思う」「まあそう思う」に傾いているのに対し，〈テキトウ〉，〈マジメ〉は「あまりそう思わない」「思わない」への傾きが見られる。

表4-7　学年性別「自分の努力によって社会が変わると思う」に対する回答　（%）

学年	学年	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
女	1	15	44	39	2	0
	2	21	31	37	9	3
	3	10	23	57	10	0
	4	5	31	48	14	2
女 合計		14	33	44	7	1
男	1	21	41	32	4	2
	2	14	30	39	16	1
	3	10	37	47	7	0
	4	3	41	45	10	0
男 合計		14	37	39	9	1
総計		14	35	42	8	1

表4-8　類型別「努力によって社会が変わる」に対する回答　（%）

類型	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
ケンゼン	19	39	39	3	1
ゲンキ	24	38	33	5	1
テキトウ	5	24	53	18	0
マジメ	2	36	51	10	1

現在の日本社会は公平さが確保されていると思うか否かをたずねた質問では，全体の81％が「あまりそう思わない」「思わない」と回答しており，女子のほうに悲観的な見方がやや多い。4年女子で「あまりそう思わない」「思わない」という回答が93％を占めているが，ここには就職活動等におけるジェンダー格差の影響が推察される。この質問については，〈ゲンキ〉に「まあそう思う」，〈マジメ〉に「思わない」という回答が多いことが注目される。

表4-9　学年性別「現在の日本社会は公平さが確保されている」に対する回答　（％）

学年	学年	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
女	1	0	16	65	19	0
	2	2	14	59	22	3
	3	1	15	55	29	0
	4	0	5	43	50	2
女 合計		1	14	58	26	1
男	1	2	20	48	28	2
	2	5	16	51	26	1
	3	0	22	53	25	0
	4	0	31	52	17	0
男 合計		2	20	51	25	1
総計		1	16	55	26	1

表4-10　類型別「現代日本社会は公平さが確保されている」に対する回答　（％）

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
ケンゼン	2	14	57	26	1
ゲンキ	3	20	56	20	1
テキトウ	0	18	59	23	0
マジメ	1	14	44	39	1

第3節 生活への満足度

現在の生活に満足しているか否かをたずねた質問では，全体の75％が「そう思う」「まあそう思う」と回答した。「あまりそう思わない」「思わない」と回答した不満足層は24％である。女子のほうが男子よりも満足度がやや高いといえる。クラスター別に見ると，〈ケンゼン〉〈ゲンキ〉〈テキトウ〉〈マジメ〉の順で満足度が下がっていく。

表4-11　学年性別「現在の生活に満足している」に対する回答　（％）

学年	学年	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
女	1	18	61	19	2	0
	2	25	52	18	2	3
	3	12	65	18	5	0
	4	17	62	19	2	0
女 合計		18	60	18	3	1
男	1	17	55	23	4	1
	2	18	51	23	8	1
	3	12	62	27	0	0
	4	17	52	28	3	0
男 合計		16	55	24	4	1
総計		17	58	21	3	1

表4-12　類型別「現在の生活への満足度」に対する回答　（%）

類型	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
ケンゼン	20	61	15	3	0
ゲンキ	21	56	20	2	1
テキトウ	11	59	26	5	0
マジメ	14	50	31	3	1

この結果を先の質問との関係でみてみよう。自分の努力では社会は変わらないと考える傾向が強い〈テキトウ〉〈マジメ〉は，生活満足度が高いとはいえない。また，特に〈マジメ〉は現代社会には公平さが確保されていないと考える傾向も強い。一方，自分の努力によって社会が変わると考える傾向が強い〈ケンゼン〉〈ゲンキ〉は，生活満足度が比較的高いことから，社会に対する楽観的認識と生活満足度には一定程度の関連があることがうかがえる。

第4節 自己意識

圧倒的多数の学生が「自分らしく生きること」を重視しているなかで，自分には「自分らしさ」があると思うと答えている学生は76%であった。一方，全体の6割前後の学生が，「自分がどんな人間かわからなくなることがある」と回答している。興味深いのは，「自分がどんな人間かわからなくなることがある」学生が6割近くいるにもかかわらず，8割弱の学生が「自分らしさ」を持っていると思っていることである。これは，持っているはずの自分らしさをまだ発見できていない，という意識のあらわれであるといえようか。

クラスター別に見ると，〈マジメ〉は「自分がどんな人間かわからなくなる」ことが比較的少ない。もっとも「わからなくなる」傾向が強いのは〈ゲンキ〉であるが，その大多数が「自分には自分らしさがある」と思っており，やや矛盾がみられる。これは，存在するはずの「自分らしさ」をまだ発見できず迷っている状態にあることを示しているのだろうか。

一方，〈テキトウ〉は「自分らしさ」があるとは思わない傾向が強い。しかし，その大多数が「自分らしく生きることは大切である」と考えていることから，〈テキトウ〉が現状の自己に対してやや否定的な見方をしている可能性がうかがえる。

表4-13　学年性別「自分らしく生きることは大切である」に対する回答　（%）

学年	学年	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
女	1	81	18	0	0	1
	2	73	24	0	0	3
	3	60	38	2	0	0
	4	71	21	5	2	0
女 合計		72	25	1	0	1
男	1	71	27	0	1	1
	2	63	34	0	3	1
	3	55	45	0	0	0
	4	69	21	7	3	0
男 合計		64	33	1	2	1
総計		69	28	1	1	1

表4-14　類型別「自分らしく生きることは大切である」に対する回答　（%）

類型	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
ケンゼン	75	24	0	0	1
ゲンキ	80	20	0	0	1
テキトウ	56	41	1	2	0
マジメ	59	36	3	1	1

表4-15　学年性別「自分がどんな人間かわからなくなることがある」に対する回答　（%）

学年	学年	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
女	1	13	42	40	5	0
	2	18	38	29	12	4
	3	20	43	27	9	1
	4	26	36	26	12	0
女 合計		18	40	32	9	1
男	1	33	29	32	4	2
	2	28	28	23	21	1
	3	22	37	33	8	0
	4	17	41	24	17	0
男 合計		27	32	28	12	1
総計		21	37	31	10	1

表4-16　類型別「自分がどんな人間がわからなくなる」に対する回答　（%）

類型	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
ケンゼン	20	36	31	11	1
ゲンキ	27	39	24	9	1
テキトウ	18	43	31	7	1
マジメ	20	29	38	12	1

表4-17　学年性別「自分には自分らしさというものがあると思う」に対する回答　（%）

学年	学年	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
女	1	21	53	24	2	0
	2	26	50	18	2	4
	3	17	58	23	2	0
	4	38	36	17	7	2
女 合計		23	52	21	2	1
男	1	24	50	18	6	1
	2	39	38	16	6	1
	3	32	48	17	3	0
	4	31	48	14	7	0
男 合計		31	45	17	6	1
総計		27	49	20	4	1

表4-18　類型別「自分には自分らしさがあると思う」に対する回答　（%）

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	思わない	無回答
ケンゼン	30	51	17	2	0
ゲンキ	29	53	15	3	1
テキトウ	18	45	34	3	1
マジメ	30	46	12	11	1

第５節　まとめ

社会意識についてクラスターごとにまとめると，以下のようになる。

〈ケンゼン〉は，政治や社会への関心が比較的強いが，新聞や書籍を通じて積極的に情報を摂取しているわけではない。生活満足度は高く，自分の努力が社会を変えうるという見通しをもつ傾向が強い。思考の傾向としては，やや楽観的な性格が強いといえるだろう。

〈ゲンキ〉は，〈ケンゼン〉と同様に生活満足度が高く，自分の努力が社会を変えうるという見通しをもつ傾向が強いが，現在の日本社会は公平であると考える割合が他と比べて若干高いことに特徴がある。社会観は〈ケンゼン〉よりも楽観的であるといえるが，自己意識についてはやや混乱がみられる。「自分らしさ」を精力的に追求しているのが〈ゲンキ〉であるといえようか。

〈テキトウ〉は，政治や社会への関心が他に比べて低い。生活満足度は高くはなく，社会観も悲観的であり，自己意識もさほど肯定的ではない。

〈マジメ〉は，社会観は悲観的で努力が報われるという意識も低いが，政治や社会への関心が高く，新聞や書籍をよく読んで情報摂取をしているようだ。生活満足度は高くはないが，自己意識は比較的安定しているといえるだろう。

第５章 まとめ

ここでは以下の手順で論述をすすめていく。まず，第１章で提示した学生類型が，第２章～第４章に示してきた諸領域における学生の意識に，どのように現れているのかを示す。各章の分析の全体的把握をすることに他ならないが，同時に学生達の意識諸領域の間のズレや矛盾をも把握する試みでもある。

次いで，各章の分析には含まれていなかった項目として，学科別と学生の家族の居住地の２変数と学生類型との関連をみる。これらを経た上で，本研究の成果と課題を簡潔に述べる。

第１節 全体を通してみた学生類型の意味

〈ケンゼン〉〈ゲンキ〉〈テキトウ〉〈マジメ〉と名付けた学生の類型が持つ意味に対して，それぞれの章で分析を行ってきたが，それを総括的にみてみる。

表5-1　類型別学年・性別の特徴

	学年	性
ケンゼン	１年生で大	女性：４年生で再び増加，男性一貫して減少
ゲンキ	—	男女ともに２年生で増加
テキトウ	—	—
マジメ	４年生で大	男女ともに学年上昇によって増加

表5-2　類型別学生の対人関係の特徴

	友人数	親友	恋人	同棲	不安の有無	不安の内容
ケンゼン	10人以上最多	いるが最多	差異なし		あるが最大	学業
ゲンキ	ほぼ並んで多い	ほぼ並んで多数		最少	最少	—
テキトウ	減少	減少			次いで少い	—
マジメ	最少	最少		最大	次いで高い	人生

表5-3　類型別学外での学びの特徴

	図書館利用	サークル	アルバイト	鳥取で利用した施設	出来事との出会い
ケンゼン	利用率中位	参加率最大	常時している最大	図書館，博物館，遊園地，海，カラオケ，講演会，温泉	最も高い
ゲンキ	利用率中位	参加率最大	常時している高い	スキー場，ゲームセンター，カラオケ	高い
テキトウ	利用率最少	参加率最小	中間的位置	パチンコ	最も低い
マジメ	利用率最大	参加率中位	常時している最少	図書館，博物館，舞台	中間的

表5-4　類型別社会意識の特徴

	社会変革の可能性	日本社会の平等感	生活満足度	自分らしさの追求	自己理解不能感	自分らしさの存在感
ケンゼン	肯定する者多数	—	高い	強くそう思う	—	—
ゲンキ	肯定する者最多	高い平等感	高い	最も強くそう思う	最も強い自己理解不能感	—
テキトウ	否定する者最多	—	低い	最も弱くそう思う	—	最も低い存在感
マジメ	否定する者多数	強い不平等感	低い	弱くそう思う	最も弱い自己理解不能感	低い存在感

以上に示してきた，各類型ごとの特徴をまとめてみると学生の姿が全体として浮かび上がる。

〈ケンゼン〉類型の学生達

この類型の学生達は，入学当初には最も多数を占めている。学年進行と共に全体としては減少するようにみえるが，それは男子の場合であって，女子の場合3年→4年と再び増加する。友人数が最も多く，親友も持っていると答える者が最も多い。サークル参加率は最大であり，アルバイトも常時していると答える者が最も多い。また，鳥取で利用した施設は最も多岐にわたっている。このようにみてくると，このタイプの学生はキャンパスライフを最も楽しんでいると言えそうである。しかし，不安がある者も最も多く，その内容は学業であると答える者が多い。社会意識では，社会変革の可能性に肯定的評価，生活満足感の高さ，自分らしさの追求に関して，類型間では2番目だが，強くそう思うと答える者が多い。

以上のようにこの類型の学生達は，大学に入学して，様々な活動に取り組み，多様な人間関係を結び，充実した日常をおくっている。また彼らの社会意識に関しても積極的，肯定的な態度を示しているのである。そうした日常をおくる彼らではあるが，学業を軸に不安や悩みを持っている者が大きいという点にも注目させられる。

この類型の学生には学業，生活，社会意識の諸領域に関して不安な内容は存在しないように思える。ただ，彼ら自身があげている最も強い不安，悩み，その中心としての学業の問題に関しては，大学，学部の対応が必要であろう。

〈ゲンキ〉類型の学生達

学生生活充足感の高さという意味ではこの類型の学生ももう一つの典型的タイプとして登場する。この類型の学生は2年生に特に多数を占めている。友人，親友は多いが，同棲している者は最も少ない。不安や悩みの有無では，このグループの学生が最も少ない。サークル参加者は最大であり，アルバイトをしている者も多数である。鳥取で利用した施設では，スキー場，ゲームセンター，カラオケが特にこの類型において高い比率を占めている。自分を変える出来事との出会いがあった者は，この類型では高

くなっている。社会意識でみると，社会変革の可能性を肯定する者が多く，日本社会の平等感の評価は高く，そして生活満足度も高い。また最も強く自分らしさを追求している。しかし，そのことが自分に関して認識を深めた結果では必ずしもないことは，この類型の学生が最も強く自己理解不能感を示していることからうかがえる。このことは彼らが示す積極的な活動や意識の裏側にある迷いを意味するものなのであろうか。

以上のようにこの類型の学生も積極的な学生生活を経験してきていると言えるだろう。しかし，先にみた〈ケンゼン〉類型の学生と特に違う点は，同棲をしている者がこのグループで特に低いこと，そして，不安や悩みを持つと答える者も最も低くなっていること，及び鳥取で利用した施設の違いの3つである。

この類型の学生に関しても彼らの学生生活諸領域の意識に不安定な要素はあまりみられない。ただ，強い自己理解不能感を持ちながらの行動であることには注意しておく必要がある。彼らの多様な活動は自分をよく理解した結果としての行動ではなく，逆に自分という存在に何ができるかを知らないが故に能動的に振る舞っているとしたら，その結果が負の効果をもたらした場合には彼らの諸特徴が変容する可能性をはらんでいるように思える。

〈テキトウ〉類型の学生

この類型の学生では，大学生活諸領域に関して消極的な態度が目立っている。友人数及び親友の有無ではいずれも先に上げた2つの類型と比して減少している。図書館利用頻度は最少である。またサークル活動参加者もこの類型で最少である。鳥取で利用した施設ではパチンコ店が唯一上げられる。大学進学後自分を変える出来事との出会に関しては，出会ったと答える者は最も少ない。不安・悩みも少ない。社会意識に関しては，社会変革の可能性に関して否定的に評価する者が最も多く，生活満足度も低い。生き方に関して，自分らしさを追求するに賛成する者が最も少なく，また最も低い自分らしさの存在感を示す類型である。

以上のように消極的で非活動的な意識像がこの類型の特徴である。彼らのそうした態度は一方では彼らが生活の価値を大学の中には見出していないことに由来していると言えるかも知れない。と同時に満足できないにもかかわらず，社会変革の可能性に否定的にならざるを得ないという，より深い意識と社会のあり方との関係の問題が存在しているように思える。

この類型の中からドロップアウトする者が生まれる可能性は最も高いように思える。教員，大学との接触を最小化することが彼らの大学生活の戦略であるから，彼らに対して教員，大学が取り得る対策は，非常に限定されている。これまで大学で用意してきた対応は，学生が所属集団に把握されていることを前提にしてそこに対して働きかけるか，あるいは相談窓口，カウンセリング，医師による治療窓口等によって対応するかであったが，実際には大学への所属意識は薄く，相談しようという意志も持たない学生達に対しては，あまり有効ではないのである。この類型に属する学生達の問題は，恐らくこれからも続くであろう。ただ，彼らの数が増加しつつ推移するのか，それとも減少しつつ推移するのかは，大学の雰囲気にとって大きな問題になる。それ故に彼らがより積極的に自分の学業や生活をとらえることが可能になるような，彼らの日常を彼らなりに意味づけることが可能であるような問題提起をしていくことが重要であるように思える。

〈マジメ〉類型の学生

この類型の学生は男女いずれの場合も学年上昇と共に増え4年生で最も多数になっている。対人関係

では友人は最も少なく，親友がいると答える者も最も少ない。異性との関係では同棲している者が最も高い。不安や悩みを持つ者は高く，その内容として特に高いのは人生についての不安や悩みであると答える者が多い。学内外での学びの場をみると，図書館利用率はこの類型で最も高い。サークル参加者の比率は中位で，アルバイトをしている者は最少である。鳥取で利用した施設では，図書館，博物館，舞台が特に高い。入学後自分を変える出来事との出会いに関しては中位となっている。社会意識をみると，社会変革の可能性を否定的にとらえる者は多く，日本社会の平等感に関しては最も強い不平等感を持っている。生活満足度は低い。弱い自分らしさの追求意識を持ち，そのことが自己理解不能感の弱さとつながっている点,また自分らしさの存在感の弱さにつながっている点に注目させられる。

この類型の学生達は，一方ではかって一つの類型として存在していた学業を軸に学生生活を組み立てる類型とよく似ている。そういう行動規範からすれば友人とのつきあいが最も少ないこと，図書館利用の高さ，サークル，アルバイトの低さ，学外施設利用に関する特殊性などは了解できる。しかし，そうした古典的な「真面目な学生像」とかなりくいちがっている部分がみられる点にも注目させられる。それは一つには恋人，同棲の高さである。異性とのつきあいの側面ではこの類型の学生は高いのである。もう一つは，社会に関する否定的な評価の強さである。その意識は彼らの中では強くそう思われているのである。しかし，彼らは自分らしさの存在感に関して最も低い回答結果を示しているのである。こうして我々がとらえた〈マジメ〉類型の学生は，ある意味では理解しやすい学生類型像であるようにみえながら，そのままでは完結できない部分を持っているように思える。

この類型の学生達は，一般的にはあまり問題がある学生達のリストにはのらないであろう。しかし，彼らが持つ前述の2点は，場合によっては大きな問題になり得る。同棲問題はおくとしても，後に上げた不安定さを抱いた社会に対する否定的評価の意識は，学生生活から次の選択が迫られる段階においては，大きな課題となるだろうと思われる。

第2節 学科別，出身地及び家族との居住の有無別類型分析

(1) 学科別の類型分布

学科別の学生類型の分布を示したのが表5-1である。〈ケンゼン〉類型は地域教育学科では特に高くほとんど半数を占めている。〈ゲンキ〉類型は地域文化学科で最も高い，地域教育学科でも高くなっている。〈テキトウ〉類型は地域教育学科で15％と特に低いが，他の学科ではいずれも25～29％を占め差異がない。〈マジメ〉類型も地域教育学科で6％と特に低いが他の学科では12～17％を占めてい

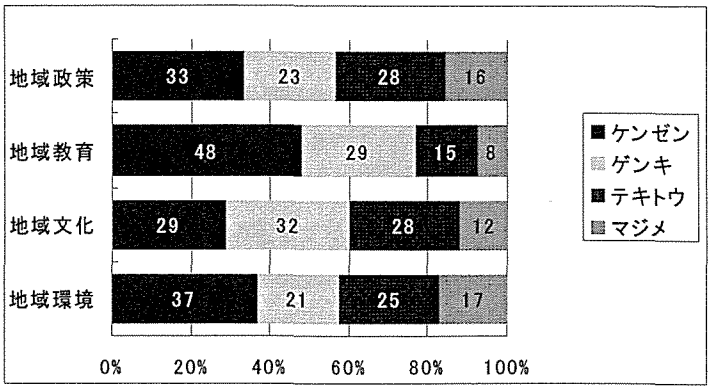

図5-1　学科別学生類型

χ2乗有意さ検定　.05未満

る。以上をまとめると地域教育学科の〈ケンゼン〉類型の圧倒的な高さ，地域文化学科における〈ゲンキ〉類型の高さという特徴と，地域教育学科以外の学科では4つの類型がほぼ同じように現れていることがわかる。

(2) 出身地及び家族との居住の有無別類型分析

学生生活が学生の出身家族と同居しているか否かで，彼らの意識類型が変化するのかを確かめるためにクロス集計を行った。用意した変数は2つである。1つは出身地域である。直接の家族との同居の有無を聞いていないのだが，ほぼ推測できる。いま1つは，現在家族と居住しているか否かの問である。結果を図5-2，図5-3に示す。どちらの分析もχ2乗検定で5％未満の結果であり有効であると判定した。

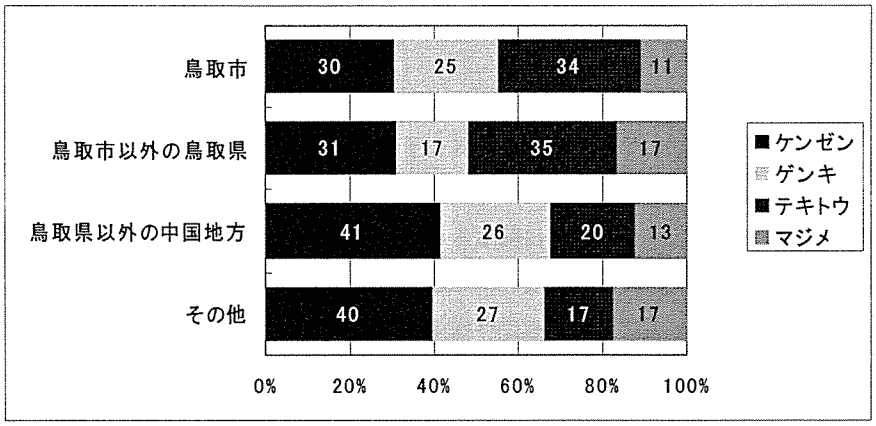

図5-2　出身地別学生類型

χ2乗有意さ検定　.05未満

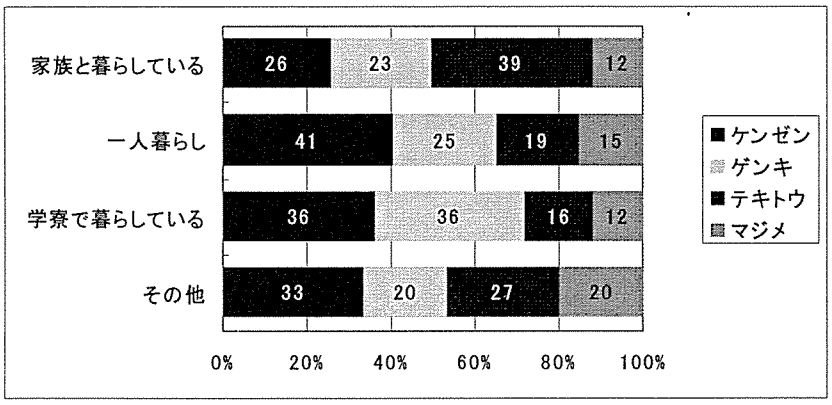

図5-3　居住形態別学生類型

χ2乗有意さ検定　.05未満

〈ケンゼン〉類型の学生は鳥取県以外の中国地方，及びその他の地域（中国地方から離れた地域出身者）で4割を占め高い。逆に〈テキトウ〉類型は鳥取市及び市内以外の鳥取県内で高い。同様に，居住形態別でみると，一人暮らしで〈ケンゼン〉類型が，家族と同居している学生で〈テキトウ〉が特に高いという結果である。

この結果は何を意味しているのだろうか，県内と県外の学生の性格に基本的には差異がないと仮説するとすれば，高校までの自宅からの通学を継続する学生が〈テキトウ〉類型になり，逆に独立して生活

する学生が〈ケンゼン〉類型になっている比率が明らかに高いことを示している。これは，これまでよく言われてきた，学生生活の危機の言説とは真っ向から異なった結果である。地域社会の思考も，親や本人の思考も安定した親元からの通学を支持し，願ってもいるが現実には親元からの大学生活は，彼らの成長にとっては負の要因でもあることを認識する必要があろう。このことは，大学を地域社会に根付かせることを目指す発想を進める場合，地域に根ざすことの意味を，地域出身の学生を増やすことだとあまりに単純に理解することの危険性を示しているように思える。大学が地域社会と結びつくことは大学にとっても地域社会にとっても重要なことである。しかし，そこで教育する学生がその地域出身であるか否かの問題とは異なると考えるべきではないだろうか。この結果及びその意味は今後さらに追求される必要があることは言うまでもない。

第3節 本研究の成果と残された課題

研究の成果として，①鳥取大学学生意識から4つの類型を発見し得た点，②学生類型が対人関係，学外での学び，社会意識それぞれに関して有効な差異を示すものであった点，③学生類型を学科，出身地域との関連でみると特徴的な差異が発見された点である。

この調査結果から得られた，学生の指導に関する示唆は，

第1に，学生の類型ごとに特徴が明確に現れたことである。その中でも〈テキトウ〉類型に注目する必要があり，〈マジメ〉類型も留意すべき点が存在することである。

第2に，学生の大学生活への指導・援助を考える際に，彼らが示す意識や行動の特徴をばらばらに把握するのではなくて，彼らなりの論理を踏まえる必要があるし，またそうでなければ有効な手だてを与えることはできないように思える。そしてその場合，彼らが抱える問題を解決するために，教員，大学がなし得ることとしてこれまで行われてきた様々な試みに加えて，学生達自身に自分達の抱えている問題とその解決の可能性を語らせることを進める必要があると考える。

最後に小論では十分にとらえきれなかった項目を上げ，残された課題として提示する。

① 学生の類型分析をより深めるために2007年度調査によって再度分析を試みること，

② 学生の学習・教育の側面に関する類型間の分析を試みること，

③ その上で，類型分析の相対的な把握を試みること

以上である。

本論文は過去4年間にわたって継続的に実施してきた教育地域科学部及び地域学部学生調査結果の2006年度調査の一部を利用させて頂いて記述したものである。調査結果全体の分析・記述はまだ残された課題となっていることを記しておく。

＜注＞

i ヨーゼフ・ベン＝デビット『学問の府』サイマル出版会，1982年。特定の職業目的や専門教育を受けようという明確な目標をもって大学に進学する学生を「伝統的学生」，成熟を求め，自己発見を求めて大学にやってくる学生を「一般学生」（general student）とする。

ii 武内　清『キャンパスライフの今』玉川大学出版部，2003年。

iii 新村洋史『大学生が変わる』新日本出版社，2006年。

iv 占部慎一「＜ラップ＞と＜学生服＞と＜逆野球帽＞」佐藤学他編『学び合う共同体』東京大学出版会，1995年。

本田由紀は,「ガリ勉」があるステイタスをもって受け入れられていたと語る（内藤朝雄『いじめと現代社会――「暴力と憎悪」から「自由ときずな」へ』双風社, 2007年)。

v 宮崎あゆみは高校生女子を「勉強グループ」「オタッキーグループ」「一般グループ」「ヤンキーグループ」の４類型で把握する。宮崎あゆみ「ジェンダー・サブカルチャー　研究者の枠組みから生徒の視点へ」『教育のエスノグラフィー』第11章

vi 斎藤　環や三浦　展, 溝上慎一らが,「自分探し」を否定的に検討している。

vii 溝上慎一『現代大学生論――ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』日本放送出版協会, 2004年。杉浦　健・尾崎仁美・溝上慎一「大学は何をする場所？（1)」『日本心理学会第67回大会発表論文集』1998年。尾崎仁美・杉浦　健・溝上慎一「大学は何をする場所？（2)」『日本心理学会第67回大会発表論文集』1998年。なおここで提示されている５類型の命名は溝上によるものを使用している。

＜引用文献＞

立花　隆（1988）青春漂流　講談社文庫

鶴田和美（2001）青年期：アイデンティティの危機　下山春彦・丹野義彦(編)講座臨床心理学135-149　東京大学出版会

Erikson, E. H (1982) The life cycle completed. W. W. North & Company.

溝上慎一編（2001）大学生の自己と生き方　ナカニシヤ出版

南　博文・山口修司（1992）大学生活への移行　山本多喜司・Ｓ・ワップナー(編)人生移行の発達心理学179-204　ナカニシヤ出版